



創立 125 周年記念招聘論文の紹介

早稲田大学は 2007 年をもって創立 125 周年を迎えた。創立 125 周年記念事業として、政治経済学術院もいくつかの講演会・シンポジウムを企画・実施しており、2007 年 5 月 11 日には現代政治経済研究所が主催するシンポジウムを開催した。駐日欧州委員会代表部の後援を受けて、同日（10：20～17：50）早稲田大学小野記念講堂において、以下のようなプログラムの「2007 年度日・EU フレンドシップウィーク・シンポジウム」を開いた。

テーマ：世界の中の EU

開会の辞：谷 藤 悦 史（早稲田大学現代政治経済研究所長・教授）

【基調講演】

講演者：ヒュー・リチャードソン（Hugh Richardson, 駐日欧州委員会代表部大使）
“Challenges of Enlargement”

【シンポジウム 1】

報告者：アン・ダイトン（Anne Deighton, オックスフォード大学ジャン・モネ・チェア）

“European Integration History: The EU as a World Security Actor?”

コメント：ハートムット・マイヤー（Hartmut Mayer, 早稲田大学訪問学者、オックスフォード大学講師）

【シンポジウム 2】

報告者：遠 藤 乾（北海道大学法学部教授）

「統合の終焉？——憲法なき拡大ヨーロッパ」

報告者：廣 田 功（新潟大学教授、東京大学名誉教授）

「ヨーロッパ経済統合史と EU」

コメント：浦田秀次郎（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授）

【特別講演】

講演者：ギュンター・グロッシュ（Günter Grosche, ユーログループ議長特別顧問）
“The Euro and the EU: Past, Present and Future”

閉会の辞：若田部昌澄（早稲田大学現代政治経済研究所幹事・教授）

司 会：中 村 英 俊（早稲田大学現代政治経済研究所幹事・准教授）

このシンポジウムに、私たちはダイトン氏（Dr Anne Deighton）を招聘した。本号に収録する論文は、同氏が準備した報告ペーパーを武井信幸氏が翻訳したものであ

る。

ダイトン論文が冒頭で述べるように、今年は EU（欧州連合）にとって記念すべき年であり、今回のシンポジウムは、ローマ条約 50 周年を記念すべく世界中で数多く開催される研究大会の一つでもあった。今回のシンポジウムは、駐日欧州委員会代表部の後援を受けて、毎年 5 月に日本中で繰広げられる「日・EU フレンドシップウィーク」のイベントの一つとしての性格も持つ。1950 年 5 月 9 日にロベール・シューマンが「独仏の和解」と ECSC（欧州石炭鉄鋼共同体）の設立を訴えた記念日である「ヨーロッパ・デイ」の頃には、毎年、早稲田大学現代政治経済研究所も「日・EU フレンドシップウィーク・シンポジウム」を主催してきた。今年のシンポジウムは、毎年恒例のイベントとしてのみならず、早稲田大学創立 125 周年およびローマ条約 50 周年を記念するイベントとしても開催された。

このような記念すべきシンポジウムとして、私たちは上記のようなプログラムを組んだ。リチャードソン大使には、特に EU 拡大後に EU が抱える様々な課題を中心に基調講演をお願いした。この時期に来日中だったグロッシュ氏には、単一通貨ユーロと EU について、特別講演をお願いした。

両講演に挟まれる形で、「世界の中の EU」をテーマにシンポジウムを企画した。EU の現状については、2004 年 10 月に調印された欧州憲法条約が発効される具体的な見通しが立たない状況下で、どちらかという悲観論が説得力を持つ情勢にあった。それゆえに、今回のシンポジウムは、ヨーロッパ統合が辿ってきた紆余曲折の歴史を多角的に振り返る報告を中心に組み立てることにした。悲観論でも楽観論でもない、歴史に根ざした現実主義と理想主義の視座が、このような時こそ必要だと考えたからである。

ダイトン氏は、ヨーロッパ統合史の専門家として広く知られた研究者であり、イギリスから招聘すべく交渉した。この交渉は、ダイトン氏とオックスフォード大学の同僚であり、昨年 12 月から 1 年弱、早稲田大学訪問学者として滞在中のマイヤー氏 (Dr Hartmut Mayer) に大きく依存した。ダイトン氏から幸い快諾をいただいたのを契機に、ヨーロッパ経済統合史の専門家である廣田功教授が、そして、国際政治学者としてヨーロッパ統合史を体系的に研究する国内グループをリードする遠藤乾教授が、次々にシンポジウム報告を快諾してくださった。

ダイトン氏は、1991 年以降、ヨーロッパ統合史を研究する欧州各国の教授によるグループ (リエゾン) の主要メンバーとして活躍しており、ミルワード (Alan Milward) 教授らとともに様々な研究を重ね、この研究分野の主要学術誌である *Journal of European Integration History* の創刊当初から編集委員を務めている。イギリスのレディング大学を経て、オックスフォード大学で教鞭をとるダイトン氏は、1997 年には、それまでのヨーロッパ統合史に関する研究が認められ、欧州委員会の

認可するジャン・モネ・チェア（ダイトン氏の場合は *Jean Monnet ad personam post*）に就いた。1997年以降、同大学ウォルフソン・カレッジに所属しているが、1998～99年はパリ大学で、2005～06年はジュネーブの高等国際問題研究所で招聘教授も歴任した。主著として、*The Impossible Peace: Britain, the Division of Germany and the Origins of the Cold War, 1945-1947* (Oxford: Clarendon Press, 1990); *WEU, 1948-1998: From the Treaty of Brussels to the Treaty of Amsterdam* (ed. with Eric Remacle, Brussels: Institut Royale des Relations Internationales, 1998); *Widening, Deepening and Acceleration: The European Economic Community, 1957-1963* (ed. with Alan S. Milward, Baden-Baden: Nomos, 1999); *Dynamiques européennes: nouvel espace, nouveaux acteurs, 1969-1981* (ed. with Elisabeth du Réau et Robert Frank, Paris: Publications de la Sorbonne, 2002); *Securing Europe? Implementing the European Security Strategy* (ed. with Victor Mauer, Zurich: ETH Zurich, 2006) などがある。

ダイトン論文は、近年ますます世界的な安全保障アクターとしても行動しようとしてきたEUについて、その意義をヨーロッパ統合の歴史の中で考察しようとして試みている。この論文では、冷戦期の歴史的文脈の中でEDC（欧州防衛共同体）設立に失敗したことに触れたうえで、冷戦後の文脈の中で安全保障アクターとしてのEUが台頭してきたことを見事に描き出している。ダイトン氏が限られた紙幅の中で十分に描くことができなかった冷戦期における変化の諸相については、同氏の他の論文を参照すべきであろう。ところで、この論文が執筆された後、6月末には欧州理事会が開催された。EU首脳は、欧州憲法条約それ自体の発効は諦めて、それを簡素化した新たな「改革条約」を作成することで政治合意に至った。ヨーロッパ統合の歴史研究は、このように法制度的な紆余曲折だけに「統合」の本質を見るべきでないことを私たちに教えている。ダイトン論文は、1998年12月サン・マロで開催されたブレア首相とシラク大統領の英仏首脳会談を重視している。2007年5～6月に誕生したブラウン首相とサルコジ大統領の新しい英仏首脳が、安全保障アクターとしてのEUの、そしてヨーロッパ統合の歴史の新しいページを開くことができるのか。このような将来の方向を考える際にも、ダイトン論文は良いガイドとなるかも知れない。

【文責】中村英俊（早稲田大学政治経済学術院准教授）